

真実だと思っていたものが実は虚偽であり、正しいと信じていたものが実はまやかしだったと知った時、人間は人生の方向性を見失います。天皇が神であり、敵の攻撃からは神風が守ってくれ、アジアの解放のために戦っていると教えられていた若者の一人は、敗戦後、実は天皇は人間であり、神風は吹かず、日本の軍隊が中国や東南アジアでありとあらゆる残虐行為を行っていたことを知った時、挫折し、自暴自棄に陥ります。

以下は17才で敗戦を迎えたこの軍国少年の日記の数行です。「俺は分からなくなった。この世の中に正しいものはあるのか。信じるに足るものはあるのか。すべてが嘘で、すべてがごまかしではないのか。」

旧約の預言者イザヤの時代もまた、信じるに足るものはあるのか、嘘でないものがあるのか、と問わざるを得ない時代でした。

40年間栄華と栄光を極めたダビデ王国は、その息子ソロモンの死後、北と南に分裂してしまいます。永久に存続する筈だったダビデ王国は、もろくも崩れ去ってしまったのです。

ヘブライの人々は、ダビデ王国不滅のイデオロギーが虚偽でしかなかったという事実直面して人生の目的を失ってしまいました。神はイスラエルに、他国に君臨する力と権威を与えてくださる。神の審判が自分たちに下ることはあり得ない。自分たちは特別な存在だ、とする偏狭な愛国主義は、がらがらと崩れ落ちてしまったのです。

イスラエルの民は、敗戦直後のあの日本人の若者の様に「すべてが嘘で、ごまかしではないのか」と思って自暴自棄に陥ってしまったのです。

その彼等に新しい生き方を指し示し、人間らしく生き直そう、と呼びかけたのが預言者イザヤでした。イザヤが指し示した道、それは弱い者と強い者が助け合い、補い合って生きる、和解と慈しみの道だったのです。そのような生き方は、神が人間に対して抱き給う夢なのだ、と彼は言うのです。

イザヤは神の夢を実に印象深い詩的表現を駆使して人々に語りかけています。「狼は子羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供はそれらを導く。牛も熊も共に草を食み、その子らは共に伏し、獅子も牛も等しく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の穴に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。」

しかし、この神の夢は、余りにも現実離れしているが故に幻想に過ぎないのではないのでしょうか。所詮絵に描いた餅に過ぎないのではないのでしょうか。

しかし そうではありません。何故自信をもってそう言えるのでしょうか。それは、人間の歴史の中で神の夢が完全な形で成就された出来事がたった一回あったからです。

子牛と若獅子が、乳飲み子と毒蛇が、幼子と蝮が共に育ち、共に草を食み、共に遊ぶという神のビジョンは、人類の歴史の中で、たった一回、イエス・キリストにおいて肉体化され、現実となったのです。神の夢は文字通りこの世界に成就されたのです。

私は初めに敗戦によって何も信ずることができなくなり、自暴自棄に陥った青年に触れました。以前にもお話したことですが、その青年は10年後にキリスト者となり、原爆症の治療に携わる専門医となります。

彼はキリストとの出会いを あるキリスト教関係の雑誌に寄稿した文章の中で次のように説明しています。

「私が敗戦直後に生きる方向性を失ったのは心に響くものを失ったからだった。枯渴した魂を抱えて、にっちもさっちもいかなくなっていたからだった。イエスはその私に生き直すことを教えてくれた。他者の上に立つのではなく、他者と連帯する喜びを教えてくれた。和解と癒しの器として生きる生き甲斐を与えてくれた。イエスは挫折した私に、立ち上がり、和解と平和の道具として生きよと元気づけてくれた。」

狼と子羊が共に伏す世界、乳飲み子と毒蛇が共に戯れ、何ものも滅ぼすことなく、害することもないという神の夢、それはイエス・キリストにおいて肉体化され、この目で見、この手で触ることのできる人格として歴史の只中にそそり立ったのです。

クリスチャンの生き甲斐、それは、このイエス・キリストによって背中を押して頂き、腕を取って頂き、足下に光を灯して頂きながら、人生を一步一步確実に歩み続けること、これであるに違いありません。

私達クリスチャンが、イエス・キリストこそ真実だ、と告白するのはそのためです。イエス・キリストこそ信じるに足るものだと主張する理由がここにあります。

この一週間、預言者イザヤの言葉を私達への神の夢として受け入れ、それを肉体化したイエスと共に、深く、生き生きと生きようではありませんか。

